

陳 述 書

令和6年 2 月 10 日

住所

氏名

1 私は大阪在住で、現在大学4年生です。大学では定住外国人に対する差別問題を中心に研究していましたが、大学のプログラムでリプロダクティブヘルス・ライツについても勉強しました。

2 性的指向について

私は高校生のころから、男性にも女性にも恋愛感情や性的欲求を持ったことがなく、今まで誰かと恋人として付き合いたいと思ったこともありません。将来的に子供を産むことを考えたこともありません。

最近、社会的にも性的多様性に対する理解が深まっていますが、中学生や高校生の時には、周りの友人が恋愛や性体験に興味を持ち始める中、友人と話を合わせるのにととても居心地の悪さを感じていました。中学生の時には、男女問わず性的なことに興味を持ち始めていましたが、私は友人たちの性愛に関する会話になかなか入ることができませんでした。

高校生になっても、周りが交際相手の話とか、初体験の話とかをする中で、私だけ「興味がない」と言ってしまうと周りを白けさせてしまうので、周りに併せる意味で「アイドル一筋です」と言ってしまうようにしており、自分自身を偽り続けていました。自分が恋愛に本当に興味がないと周囲に知られると、「人間としておかしいのではないか」というような言葉をかけられることもありました。高校でも、周囲に私と同じような考えをもつ人を見つけられなかったため、私と同じような性的指向（他人に恋愛感情や性的欲求を持たない人）がいるのかインターネットで検索しはじめ、インターネット上で初めて自分と同じような人を見つけました。初めて自分は人間としておかしくないと思えました。それ以降は、インターネットの知り合いや友達、性的マイノリティのコミュニティにととても救われています。女性が社会で働くという生き方は普通になってきていますが、結婚や出産をしないという生き方はまだまだ社会で排除されていると感じています。今後少子化が進行する日本社会では子どもを持たないという生き方がさらに強い批判に晒されるのではないかと危惧しています。

3 不妊手術に関する私の考え

不妊手術を受けたいと思うようになったのは、高校を卒業した頃だったと思います。周りの人に将来子供を生む存在であるという前提で扱われることが嫌でし、妊娠可能性がある自分の体にも違和感がありました。違和感を言葉で説明するのはとても難しいのですが、毎月生理が来るたびに、「自分は妊娠するために準備をさせられている」というような違和感がありました。また、自分にとって全く必要のない妊娠という選択のために毎月体調不良を経験することにうんざりしていました。自分の体に対して違和感を持つのはとても辛く、どうすればよいか調べたところ、不妊手術の存在を知りました。

その際、不妊手術を受けるためには法律で要件が定められていて、私は不妊手術を受けることが出来ないのだということもわかりました。そのような法律を知り、日本という国から「日本が必要としたときに子供を産めるように準備をしておけ」と言われているような気がしました。

2022年にカナダに留学することになり、カナダで不妊手術を受けることを検討しました。カナダは州によって医療制度が異なり、私が留学していた州では、中絶手術、避妊（ピルやIUD含む）、不妊手術（卵管結紮術）などが健康保険でカバーされていまし

た。もちろん、カナダでは全ての州で、永久的な不妊手術を受ける際に配偶者の同意や子供がいること等の要件はなく、日本に比べるとリプロダクティブヘルス・ライツの考えが社会に浸透しています。ですが、留学生が不妊手術を受けると費用がかなり高額になると聞き、留学費用に加えて手術費用を捻出することが出来なかったのでカナダでの手術は断念しました。

帰国後、日本でいくつかのクリニックに不妊手術を受けることが出来ないか問い合わせしてみたのですが、やはり、どのクリニックからも、避妊方法としてはピルやミレーナに限られていて、不妊手術は行えないとの回答を受けました。日本の法律を変えてもらうしかないんだということを再認識しました。

不妊手術を受けるかどうかは私自身の体に関する問題で、国に法律で禁止されるようなことではないと思います。私は、誰かと恋人同士になったり、子供を持つことを考えたりすることはないのです。不妊手術の要件は、女性が自分の意思で子どもを持たないという生き方が認められていないということと同じだと思います。私の体は「母体」ではなく私の体なのですから、「母体保護法」という法律で「母体の保護」のために不妊手術を禁止される理由はないはずです。

以上